～医療生協健文会の職員のみなさま～

メロス通信 不定期便

Vol.17
2024年3月号
発行：地域福祉室

～ある市町の実態から生活保護利用者の権利を守る取り組み～

生活保護に至る方のほとんどは、国保や介護保険料、税金を滞納し、ライフラインが途絶える寸前まで生活保護を拒んで我慢されています。なかには所持金が数十円しかない方もいらっしゃいます。カードローンや携帯電話のキャッシュレス機能をブラックリストになるまで使い果たし、どこからも生活費の工面ができなくなって仕方なく生活保護を利用される方も多いです。
ある市町で、そのような生活保護利用者に対し「生活保護受給者証」を市役所に受け取りにきた際に、当事者からすれば『半ば強引』に、介護保険課と国保課の窓口で生活保護費から数千円ずつ、滞納した介護保険料と国保料の返済計画を立てさせるということが発生しています。
生活保護課のケースワーカーは「他の課がいうことに口出しはできない」と言います。しかし、生活保護は最低生活費として国が定めるもの。最低の生活費から滞納しているとはいえ公費を支払うことなんて有り得ません。ただでさえ物価や光熱費が高騰しているのに、経済的にマイナスから出発している生活保護利用者に余分なお金なんてありません。
これについて地域福祉室はソーシャルワーク委員会でも協議し、生健会（生活と健康を守る会＝生活保護利用者と人々の権利を守る運動団体）と連携し、この問題に取り組んでいきます。
　※生活保護利用者…「生活保護受給者」という言葉が多く使われてきましたが、生活保護は「受けるものではなく権利」だという観点から「生活保護利用者」という言葉が人権擁護の立場から使われるようになってきています

～第２回　Club Gyaross～

3月14日、第2回Gyaross勉強会を開催しました。「生きにくさを抱え、社会的支援の貧しさに苦しむ母、Bさん」をお呼びして、参加者10名でBさんの声を聴きました。
Bさんは幼いころから不遇な家庭環境に育ち、様々な苦手の発見が遅れ障害の認定を受けないままに周囲からは誤解され、マイナスのレッテルを貼られていました。それでも子どもだけは幸せになってほしいと努力しています。Bさんの問題は、当院にたどり着くまで安心して相談できる人がいなかったことでした。
Bさんから私たちは、**『当事者の誤解や理解不足から生じる支援がどれだけ本人の生きる力を削いでいく』**か、また**『力のない当事者の立場から支援者や制度から働きかける仕組みがない』**か、当事者の置かれる厳しい現実を知りました。
最後にBさんは**『（支援者が）知っている知識だけを話すのではなく、私のことを受け止めてほしい。親身に同じ目線になって私の話を聞いてほしい』**と言葉を残してくれました。
Bさんのお話は、私たちが患者さんを理解しようとする姿勢がどうあるべきかを考えるきっかけになりました。またBさんにとっても参加者から自己肯定感を得ることがでる良い体験となりました。Bさんに深く感謝致します。
第3回のギャロスでは、これまでの学びをもとに「ジレンマが生まれる患者・利用者の諸問題」についてみんなで語り合います。飛び入り参加も大歓迎です。

年会費：300円
日時：月1回
時間：17時45分～19時
※最初の15分は何でも交流会

入会希望者は上の地域福祉室LINE QRコードからか、地域福祉室携帯（090-1229-7673）まで

『メロスふれんど』の会　活動報告

3月23日、メロスふれんどの3人と一緒に「上関原発を建てさせない山口大集会」に参加してきました。
会場の維新百年公園には、雨にもかかわらず県内外から800人が集まり、中国電力が上関町で計画する原発建設と中間貯蔵施設の建設に対して反対の声を上げました。集会では、原発事故が起きた福島と15基もの原発が集中している福井からの発言もありました。
福島からは元原発作業員が「本来原発の耐久性は30年なのに、60年超の運転を可能とする政府方針は危険極まりない、声を合わせて反対しよう」と声かけが、福井からは50年以上にわたり原発反対運動をしている僧侶が「原発は自分の故郷だけでなく、全国どこにも建てさせないために連帯しよう」と呼びかけがありました。上関の自然を守る会からは「カンムリウミスズメをはじめ多くの希少生物が生息している上関の『奇跡の海』を後世に残さなければいけない。原発反対運動は、故郷への愛情を取り戻すことと、原発交付金に頼らず自然と暮らしていくまちづくりこそが未来に繋がる」と訴えました。
上関の豊かな海に原発や核廃棄物を誘致することは断固として反対していきます！